

■ 「敗戦」を体感するにはどうしたらいいか。

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日正午、天皇の肉声で敗戦を伝えるラジオ（「玉音放送」）が流され、日本人は戦争が終わったこと、戦争に負けたことを知った。

だがこれは一体どのようなものだったのだろうか。例えば父（1937 年生）によれば、その日、午前中から竹槍訓練に行っていた祖父（1909 年生）は、「負けた負けた」といいながら帰ってきたそう。何だか筒井康隆の昔のドタバタ小説みたいにもみえる。教師をしていた祖父はいかにも真面目な人間だったが、ラジオの前でうなだれ、涙を流す、というイメージとは少し違う。人によっていろいろな反応があったのだろうか。一方で、映画『東京裁判』（1983 年）でも紹介されていた土岐善麿の歌「あなたは勝つものとおもつてゐましたかと老いたる妻のさびしげにいふ」の静かさが心にしみる。

この「敗戦」を体感するには、どうしたらよいだろうか。この課題の先には、戦争を熱心に支えた庶民の心情を体感する、という課題がある。それはさらに、当時の日本人がどのように戦争に関与し、どのような責任を持つことになるのかに関わってくるものである。

つまり、それに近づこうとすることが、今日問題になっている「歴史認識」を考えるうえで、底にある課題なのではないかと考えるのだ。歴史認識は、理性的であるべきだが、感情的なものでもある。現在の価値観から判断するだけでなく、現在からはわかりにくい当時の心情を「理解」することも重要だと思う。

とはいえ、それは簡単なことではない。心情というのはそのまま記録できるものでなく、何らかの記録が残っていたとしても、今度はそれをどう読めばよいかという問題がある。記録を沢山読み、その分当時の状況に詳しくなったとしても、結局はどこかで記録の読み手（語り継ぎの場合は聞き手）の読み方（聞き方）に任される部分もどうしても残る。（しつこいようだが、だからこそ歴史を「体感」する技法を鍛えているのである）

この「敗戦」の衝撃や「茫然自失」は、確かにわかりにくい。何故かという、私たちは敗戦という「結果」を知っている側にいるからだ。敗戦が伝えられるその瞬間まで熱心に戦争を支えていた多くの人びとの心情、あるいは「神風」を願う人びとの思いは、非合理的な感情、馬鹿馬鹿しいもの、あるいは「だまされてた」と決めつけられてしまっている。

いや、人々は心の中では戦争に反対していたと「読む」こともできる。思えば、かつて私も卒業論文や修士論文では、戦時中の特別高等警察の庶民の落書き調査資料を熱心に読んだ。落書きを反戦・反軍・反体制の思想犯罪として取り締まりながら、一般庶民の意識をどこかで探ろうとする警察の記録資料である。記録の性格上そうなのだが、そこには戦争に反対する心情が溢れていた！ 逆に言えば、それは、言論や思想に対する取り締まりが厳しくて、人々は心の中では反対していたが、表明できなかったということの証左でもある。

もちろんそういう人は少なくなかったはずである。そういう人にとっては、「敗戦」は衝撃というよりも解放であった。敗戦が希望に繋がった人である。「生きれる！」と。敗戦の日、その感情は、うなだれて泣いている人にですら、芽生えていたはずだろう。

だがそうすると、「茫然自失」のほうが理解できない。妻の漏らした言葉に驚き、感慨を深めるといふ土岐善麿の歌には、やはり素直に（どこかで）「神風」を信じていた多くの人の存在を窺わせる。もちろん戦局は苦しく、絶望的だ、多くの人が命を喪っている、だがそれでも……という思い。それをもう少し詳しく知りたい。歴史の向こう側には、何があるのだろうか。

ところで、6年前の東日本大震災の記憶に根ざした映画『シン・ゴジラ』が改めて教えてくれることは多い。逆にいえば、震災を体験していない外国の人に今回の『ゴジラ』はさっぱりらしい。その深さはいろいろだとしても、あの不安な日々を記憶を持っている人には刺さる部分がある映画だ。

結局、「お話」としては超楽観的な映画である。とどのつまり、官僚や技術者や政治家がそれぞれの持ち場で不屈の頑張りを示し、巨大な困難を克服する、という映画である。少しとぼけた反応で、その振る舞いの自然さも交えながらも、強調されていたのは、とにかく頑張ればなんとかなるといふことで、登場人物は皆、危機の克服に向けてとにかく誠実な人物だということだった。（「さあ仕事にかかろう」といふ言葉にグッときた誠実なる仕事中毒は少なくないはずだ）

実際は「そう」でなかったということもいいたいのだろう。原発は爆発してしまった。私たちには、取り返しのつかないことが起こってしまったという悔い、あるいはトラウマが共有されている。その思いの強さは逆に、真面目にやっていることそのものに対する盲信がある。

そう考えると、危機とその克服に成功することで、震災と原発事故の経験をなぞり直し、傷ついた心を癒やす、リハビリのような映画に見える。セーブしたところからやり直しがきくRPGのようだ。こうあってくれたらという願望に根ざした、震災体験の癒やし目的の映画。『シン・ゴジラ』を批評的に見たほとんどの人は、そう思ったことだろう。

ただ私は、さらに「敗戦」のことを考えてしまっていた。思えば、「これ以上なく誠実に頑張り、不平不満や足の引っ張り合いをせず、一致団結したそれぞれのベストが相乗効果を生んだはず」なのに、「結果」がもたらされなかったのが先の敗戦だったのである。

では、この映画のラスト5分を改変し、すべてが失敗してしまって水泡に帰することにしたら、どうだろう。ゴジラが最後まで退治できず、われわれのほう滅亡してしまうラスト。それが「敗戦」だったのではないか。

実は、それはこの監督の表現にも表れている。最後の最後の一瞬映し出される「アレ」は、続編への布石だとみなす人もいたと思うけれども、むしろ事態は思った以上にストレスだった、ということを示すためのものと考えた方が素直だ。この監督の持つ滅亡（への恐れを共有させること）への願望が、最後のカットに「アレ」を付け足してしまったのだ

ろう。最後の 5 分をほんのちょっと変えるだけで、この映画を正真正銘の滅亡映画にもできるんですよ。(でもやらない。例えば『猿の惑星』はそういう映画だった)

そういえば、最初の「ゴジラ」は敗戦 10 年経たずして登場した「敗戦」の追体験だった。そうした本質をこのシリーズは持っている。ただ、戦後日本社会がそうだったように、技巧を極めた表現で繰り返し追体験をしながら、衝撃的だったはずの「滅亡」は、その作用によって逆に癒やされてしまう。その癒やしの「向こう」に、理解すべきことを見つきたい。